

## 第1講

### 男もすなる日記といふものを — 貴族男性はなぜ日記を書いたのか — (2019年度第1問)

10世紀から11世紀前半の貴族社会に関する次の(1)～(5)の文章を読んで、下記の設問A・Bに答えなさい。

- (1) 9世紀後半以降、朝廷で行われる神事・仏事や政務が「年中行事」として整えられた。それが繰り返されるにともない、あらゆる政務や儀式について、執り行う手順や作法に関する先例が蓄積されていき、それは細かな動作にまで及んだ。
- (2) そうした朝廷の諸行事は、「上卿<sup>しょうけい</sup>」と呼ばれる責任者の主導で執り行われた。「上卿」をつとめることができるのは大臣・大納言などであり、また地位によって担当できる行事が異なっていた。
- (3) 藤原<sup>あきみつ</sup>顕光は名門に生まれ、左大臣にまで上ったため、重要行事の「上卿」をつとめたが、手順や作法を誤ることが多かった。他の貴族たちはそれを「前例<sup>たが</sup>に違う」などと評し、顕光を「至愚<sup>しぐ</sup>(たいへん愚か)」と嘲笑した。
- (4) 右大臣藤原<sup>さねすけ</sup>実資は、祖父左大臣藤原<sup>さねより</sup>実頼の日記を受け継ぎ、また自らも長年日記を記していたので、様々な儀式や政務の先例に通じていた。実資は、重要行事の「上卿」をししばしば任されるなど朝廷で重んじられ、後世、「賢人右府(右大臣)」と称された。
- (5) 藤原道長の祖父である右大臣藤原師輔は、子孫に対して、朝起きたら前日のことを日記につけること、重要な朝廷の行事と天皇や父親に関することは、後々の参考のため、特に記録しておくことを遺訓した。

#### 設問

- A この時代の上級貴族にはどのような能力が求められたか。1行(30字)以内で述べなさい。
- B この時期には、『御堂関白記』(藤原道長)や『小右記』(藤原実資)のような貴族の日記が多く書かれるようになった。日記が書かれた目的を4行(120字)以内で述べなさい。

解いてみましょう（第1講）Aについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア (7) の (1) に求められた  
(4) について書く。

イ 1行（30字）以内で書く。

※ この問題は (1) に入る語句に留意して解くこと！

2 資料と教科書（山川出版社『詳説日本史B』）の内容とを照らし合わせる。  
関係する教科書のページと内容は、

教科書の



（教科書の記述は、資料の内容と同じです）

3 与えられた資料をもとに作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の空欄に当てはまる語句も記されています。

(  へ、ほぼ抜き出して入れる)

求められていくことは

(ア) **10世紀から11世紀前半** の

(イ) **上級貴族** に求められた

(ウ) **能力** について書く

(1) 9世紀後半以降、朝廷で行われる神事・仏事や政務が「年中行事」として整えられた。それが繰り返されるにともない、あらゆる政務や儀式について、執り行う手順や作法に関する先例が蓄積されていき、それは細かな動作にまで及んだ。

- (2) そうした朝廷の諸行事は、「上卿」と呼ばれる責任者の主導で執り行われた。「上卿」をつとめることができるのは大臣・大納言などであり、また地位によって担当できる行事が異なっていた。
- (3) 藤原顕光は名門に生まれ、左大臣にまで上ったため、重要行事の「上卿」をつとめたが、手順や作法を誤ることが多かった。他の貴族たちはそれを「前例に違う」などと評し、顕光を「至愚(たいへん愚か)」と嘲笑した。
- (4) 右大臣藤原実資は、祖父左大臣藤原実頼の日記を受け継ぎ、また自らも長年日記を記していたので、様々な儀式や政務の先例に通じていた。実資は、重要行事の「上卿」をしばしば任されるなど朝廷で重んじられ、後世、「賢人右府(右大臣)」と称された。

この時代には、朝廷で行われる神事・仏事や政務は、 ① として整えられていた。

諸行事の  ② である上卿を  ③ ことができるのは、大臣・大納言などの  (イ) **上級貴族** のみであった。

① は  ④ まで  ⑤ のとおりに  ⑥ ことが求められた。

抜き出したものをまとめる

(イ)  に求められたのは、 ② を  ③

① を  ④ まで  ⑤ のとおりに

⑥ ことができる能力



4 30字に要約する。

解いてみましょう（第1講）Bについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア  の  について書く。

イ 藤原道長ら  が  を書く。

ウ 4行（120字）以内で書く。

2 資料と教科書の内容とを照らし合わせる。

関係する教科書のページと内容は、

教科書の



3 与えられた資料と教科書の記述から抜き出して作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の「関連する教科書のページと内容」からの抜粋も記されています。

東大チャート「貴族男性はなぜ日記を書いたのか」(2019年度第1問設問B)

()へは、ほぼ抜き出して入れる。)へは、考えて「決めぜりふ」を入れる。

※ 設問Aと同じ番号の空欄には、同じ語句が入る

求められていくことは

ア  (ア) 10世紀から11世紀前半 の  (イ) 貴族社会 について書く。

イ  (ウ) 貴族男性 が  (エ) 日記を書いた目的 を書く。

(1) 9世紀後半以降、朝廷で行われる神事・仏事や政務が「年中行事」として整えられた。それが繰り返されるにともない、あらゆる政務や儀式について、執り行う手順や作法に関する先例が蓄積されていき、それは細かな動作にまで及んだ。

【教科書の記述】

摂政・関白は官吏の人事権を掌握していたため、中・下級の貴族たちは摂関家を頂点とする上級貴族に隷属するようになり、やがて昇進の順序や限度は、家柄や外戚関係によってほぼ決まってしまうようになった。(PP. 70. L25~71. L2)

(2) そうした朝廷の諸行事は、「上卿」と呼ばれる責任者の主導で執り行われた。「上卿」をつとめることができるのは大臣・大納言などであり、また地位によって担当できる行事が異なっていた。

(4) 右大臣藤原実資は、祖父左大臣藤原実頼の日記を受け継ぎ、また自らも長年日記を記していたので、様々な儀式や政務の先例に通じていた。実資は、重要行事の「上卿」をしばしば任されるなど朝廷で重んじられ、後世、「賢人右府(右大臣)」と称された。

(5) 藤原道長の祖父である右大臣藤原師輔は、子孫に対して、朝起きたら前日のことを日記につけること、重要な朝廷の行事と天皇や父親に関することは、後々の参考のため、特に記録しておくことを遺訓した。

(7)  (1) = 諸  (8)

の  (5) が  (4) まで  (9) されていた。

(10) の順序や  (11) は  (12) や外戚関係で  (13) ようになった。

(14) できる  (8) は  (15) によって  (16) 。

これにより、 (14) できる  (8) によって  (イ) 貴族社会 での  (15) が  (17) 。

貴族は参加した  (8) や  (18) の  (19) などを  (20) して、  (21) として  (22) べき  (23) や  (24) を  (25) で  (26) に  (27) 。

抜き出したものをまとめる

⑦ ⑧ の ⑤ が ④ まで  
⑨ される一方で、⑩ の順序や ⑪ は ⑫  
や外戚関係で ⑬ ようになった。さらに、⑭ できる  
⑧ が ⑮ によって ⑯ ことで  
(イ) 貴族社会 での ⑮ が ⑰。  
そのため貴族は、参加した ⑧ や ⑱ の ⑲ など  
を ⑳ して、㉑ として ㉒ べき ㉓ や  
㉔ を ㉕ で ㉖ に ㉗。



4 120字に要約する。

今回、問題を解くことで学んだこと